

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択プログラム
「20世紀日本における知識人と教養 - 丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用 - 」
自己点検・評価を終えて

本学では、2012年度より研究プロジェクト「20世紀における知識人と教養 丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用」を組織し、活動して参りました。本プロジェクトは、文部科学省2012年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、2016年度末までの5年間の事業として、同省の支援を得て現在も継続されております。

本学は、大学全体で恒常的にPDCAサイクルを推進して大学組織の点検・改革を進めるため、実施した諸事業について、自己点検・評価活動を行っております。本プロジェクトは2014年度に中間年を迎え、文部科学省に活動の中間報告を提出いたしました(2014年9月30日)。今回は、それをふまえて本学の自己点検・評価委員会による自己点検・評価を行いました。この結果を受け、本プロジェクトの大きな意義を積極的にとらえ直すことができただけでなく、残された2年間の課題も明確になって参りました。

自己点検・評価報告書は2015年1月にまとめられましたが、その直後に、重要な進展・成果があり、それらを補って、この度本学公式サイトに掲載いたしましたので、ご高覧いただければ幸いです。

本事業は、2016年度末に完了する予定ですが、今回の中間報告結果及び自己点検・評価結果を生かし、研究事業の進展と研究基盤の形成・強化、並びに本学のリベラル・アーツ教育の一層の展開に役立てていきたいと存じます。

2015年3月

東京女子大学 学長 小野 祥子
自己点検・評価委員長 下出 鉄男

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択プログラム

「20世紀日本における知識人と教養
- 丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用 -」
自己点検・評価報告書

2015年1月

東京女子大学 自己点検・評価委員会

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択プログラム
「20世紀日本における知識人と教養 - 丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用 - 」
自己点検・評価報告書

目 次

	頁
はじめに	1
第 1 章 本事業の目的	
1 . 本研究の研究目的が達成され、研究拠点を形成することができたか	2
第 2 章 本事業を担う組織体制	
1 . 研究目的を達成するための研究体制が組み立てられているか	4
第 3 章 研究計画の進捗状況とその成果	
1 . 研究テーマ毎に定めた年度別の具体的な研究内容は計画通り進捗しているか	6
第 4 章 研究費の配分と活用	
1 . 補助対象経費は適正に配分され有効に活用されているか	11
資料	
掲載省略	

はじめに

20世紀日本を代表する思想家として知られる丸山眞男の死後、ご遺族の意向により、1998年9月、丸山の旧蔵書約18,000冊と約6,200件のノート・草稿類が、本学へ寄贈された。本学は、本学図書館に丸山眞男文庫を設置し、これらの資料を保管・調査することとした。2002年、これらの貴重な資料がひろく活用されることを願って、比較文化研究所に丸山眞男記念比較思想研究センターを附置した。センターでは、丸山眞男文庫の整理を進めるとともに、講演会、読書会等を開催し、活動成果を報告する出版物を刊行してきた。本学は、今後さらに、センターの活動を通して、丸山眞男研究の拠点としてのみならず、比較思想研究の進展にも貢献することをめざし、文部科学省2012年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業*に以下の通りのプロジェクトを組織して応募申請し、採択された。

研究プロジェクト名：20世紀日本における知識人と教養 丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用

研究テーマ1．20世紀知識人の教養と学問 丸山眞男文庫を素材として

研究テーマ2．丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

研究観点：研究拠点を形成する研究

研究期間2012～2016年度

研究代表者 現代教養学部学部長 安藤 信廣

プロジェクト参加研究者数19名

本報告は、5年間に及ぶプロジェクトの中間年にあたる2014年度において、文部科学省への中間報告を行うとともに、本学独自に自己点検・評価を行ったものである。

*私立大学戦略的研究基盤形成支援事業は、私立大学が、各大学の経営戦略に基づいて行う研究基盤の形成を支援するため、研究プロジェクトに対して重点的かつ総合的に補助を行う文部科学省の補助事業である。

本自己点検・評価報告書は、2016年度末までに及ぶ本プロジェクトの中間年度にあたり、これまでの事業の進展を中間的に総括し、今後の事業展開に生かすとともに、東京女子大学の教学の発展に一層資することをめざすものである。

第 章 本事業の目的

到達目標

本研究の研究目的を達成し、研究拠点を形成する。

1. 本研究の研究目的が達成され、研究拠点を形成することができたか

【現状の説明】

(1) 本事業の研究目的

新しい世界認識を開く基礎となる教養の重要性が注目されている今日、20 世紀において様々な知的分野で巨大な足跡を残し、教養についても独自の認識を展開した丸山眞男の業績の再評価が強く求められている。また、その業績の再評価を通じて、教養及び教養教育の現在の意義の解明が期待される。

その状況下、本事業では、以下 3 点の研究目的を設定している。

- ・ 20 世紀知識人たちの教養形成過程及び教養観を解明する。(研究テーマ 1)
- ・ 丸山眞男文庫所蔵資料をデジタルアーカイブ化し、ひろく日本及び世界に向けて公開する。(研究テーマ 2)
- ・ 新渡戸稲造、南原繁、丸山らが知識人の国際的コミュニティ形成に果たした役割を明らかにし、21 世紀における新たな知的コミュニティ形成の方向性を探求する。(研究テーマ 1, 2)

教養及び教養教育の必要性は、社会の様々な場において近年とくに強調されている。また、創立以来リベラル・アーツ教育を理念としてきた本学にとっても、現代社会の要請をふまえて教養及び教養教育について再検討することは重要な課題である。こうした社会的・学内の要請に鑑みて、本事業の研究目的は時宜を得ており適切といえる。

既に丸山文庫所蔵の資料によって、学内外で研究が進んでいるが、デジタルアーカイブの構築によって研究がさらにひろがるものと考えられる。また、教養教育に対する関心が高まっている現在、本事業の研究は高等教育のみでなく社会全体に裨益する所が大きいと考えられる。

(2) 期待される研究成果

前項の目的を達成することで、人文・社会科学の様々な領域を総合し、新しい視点をもたらす教養の重要性と今後の方向性を提示する。(研究テーマ 1) かつ、20 世紀知識人のコミュニティの実態を把握し、今後の知的コミュニティ形成に資することができる。(研究テーマ 1, 2)

また、第 章で述べるように、本事業で順次行っている丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類・楽譜類のデジタル化により、同資料へのアクセスが容易になり、同資料を利用した研究成果の発展が期待できる。(研究テーマ 2) 既に公開された資料を利用して、国内・国外の研究者が研究を進め、成果を公開している。特に丸山眞男の旧書斎の蔵書配列を再現した「バーチャル書庫」を近く公開する予定であり、丸山の知的営みを再現し追体験できる場を社会に提供しようとしている。(2015 年 3 月に公開予定)。また、デジタルアーカイブの構築も進み、近く公開する予定である。(2015 年 6 月に公開予定)。

上記の「期待される研究成果」については、丸山文庫資料を利用した諸種の成果が既に現われ始めている。とくに、丸山の思想形成の過程が丸山文庫資料によって明らかになった、という外部からの評価が示されてきている。(丸山眞男著・古矢旬編『超国家主義の論理と心理 他八篇』(岩波書店・2015 年 2 月刊)における古矢旬の「解説」)(研究テーマ 2) 本事業選定時に、「なぜ今丸山眞男か」との留意事項が付された。その点に注意しつつ、本プロジェクトとして、21 世紀における教養のあり方にとって丸山眞男の思想がもつ意味を

探求してきた。その成果は本年度（2014年度）中間シンポジウムでの報告に結実し、この留意事項への回答を用意できたと考えられ、研究目的の適切性の側面から評価できる（第章参照）。同シンポジウムは、現代世界において丸山がどう読まれているかをテーマとして開催された。苅部直の講演、及び油井大三郎、區建英、趙星銀による発表と討論を通じて、現代の日本・中国・韓国及びアメリカを含む国際社会において、丸山の政治思想並びにその思想的方法が重要な意義をもつものとして受けとめられ、新たな政治思想形成に力となっていることが明示された。（研究テーマ1）こうした成果の上に立って、丸山研究・日本思想史研究の国際的拠点を創出することが期待できる。

【点検・評価、長所・問題点】

上記のシンポジウム及び外部からの評価により、本学が研究拠点となる必要性がより明瞭になり、また現に研究拠点を形成しつつあると評価できる。

丸山文庫資料の調査・整理とそのデジタルアーカイブ構築をめざす研究テーマ2については、計画通りに作業が進んでいる。

研究テーマ1においては、各研究者の個別の研究はほぼ順調に進んでいるが、全体の統一性を保ち連絡を密にして全体の中心課題を解明して行くことが必要である。

【将来の改善に向けた方策】

上記の理由から、本事業を通じて研究拠点形成の課題を達成できると考えられる。各研究者の連携をより強め、全体的な目標を共有して研究を進め、課題達成のために十分な体制をとることに注意する必要がある。このため、テーマ1・2の責任者間の連絡を密にし研究者間の連携を強める。特に、研究者全員の打ち合わせの場を増やす等の方策を強める。

第 章 本事業を担う組織体制

到達目標

研究目的の達成に向けた研究体制を整える。

1. 研究目的を達成するための研究体制が組まれているか

【現状の説明】

本研究は、本学丸山眞男記念比較思想研究センターを研究体制の中心とし、同センター運営委員会と図書館が連携して研究支援体制を敷いている。研究者は政治学・政治思想史・国際関係史・歴史学・教育学・文学等の研究に携る東京女子大学教員 8 名と、丸山眞男研究及び日本政治思想史・政治学等の研究を行っている学外研究者 9 名、海外研究者 2 名によって構成されている。

各研究者の交流をはかり、かつ研究テーマ 1 と研究テーマ 2 の認識の共有をめざし、隔月開催の研究会において研究者間、チーム間の連携をとっている。特任研究員・研究補助員として若手研究者 6 名を採用し、補助作業には大学院生・学部学生を雇用している。

テーマ 1、テーマ 2 全体の統轄は、安藤信廣があたっている。テーマ 1 については、安藤信廣を研究代表者とし、各研究者から研究状況につき報告を受け、研究会及びミーティングにおいて統一的な進行ができるよう連絡・調整をしている。テーマ 2 は、黒沢文貴を研究責任者とし、その下に、翻刻関係（平石直昭、宮村治雄、中田喜万、河野有理）、楽譜関係（土合文夫）、書簡関係（松沢弘陽）、編集関係（黒沢文貴）の責任体制をとっている。

両テーマの連絡、調整は、安藤と黒沢両名が打ち合わせを行い、連携して研究を進め、特任研究員・研究補助員を統督している。

研究プロジェクトに参加している主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
(テーマ 1)			
安藤信廣	現代教養学部・学部長	幕末期知識人の相互交流と国際認識	20 世紀の教養の原点の究明
雨田英一	現代教養学部・教授	戦後日本における民主化と教養・文化・教育をめぐる論議 丸山眞男を中心として	近代日本の教養観と教育観の解明
小檜山ルイ	現代教養学部・教授	近代日本の知識人の系譜とキリスト教	近代知識人の知的系譜の解明
茂木敏夫	現代教養学部・教授	東アジア論と丸山眞男	東アジアにおける丸山受容史の究明
湯浅成大	現代教養学部・教授	丸山眞男のアメリカ観	日米知識人の交流関係の解明
油井大三郎	現代教養学部・特任教授	第二次世界大戦後の日米関係と丸山眞男	国際政治における丸山の役割の解明
區建英	新潟国際情報大学・教授	丸山思想史と現代中国思想の比較省察	20 世紀知識人の知的国際交流の解明
苅部直	東京大学大学院法学政治学研究科・教授	丸山眞男における精神的貴族主義の系譜	丸山における教養観の解明
孫歌	中国社会科学院文学研究所・教授	国際的視野から読む丸山政治学の政治性	東アジアにおける丸山受容史の究明
アンドリュー・バーシェイ	カリフォルニア大学バークレイ校・教授	丸山とアメリカ知識人との知的交流史の研究	日米知識人の交流関係の解明
渡辺浩	法政大学法学部・教授	丸山眞男の日本政治思想史研究とその影響	丸山の日本思想史論と知的影響の究明
眞壁仁	北海道大学大学院公共政策学連携研究部・教授	日本の教養教育と思想史学の展開	近代日本の教養観と教育観の解明

(テーマ2)			
黒沢文貴	現代教養学部・教授	文庫所蔵一次資料の網羅的な調査研究	丸山眞男文庫所蔵の未公開資料の翻刻とデジタル化の推進
土合文夫	現代教養学部・教授	文庫所蔵楽譜類とそれへの書きこみの調査研究	丸山と音楽との関わりの解明及び丸山の教養・芸術観の検討
松沢弘陽	北海道大学・名誉教授	丸山眞男への国内・国外からの来簡の調査	日本内外での丸山の影響をさぐる研究の基礎作業
中田喜万	学習院大学法学部・教授	「正統と異端」関係草稿の校訂と補注	重要一次資料の翻刻及びデジタル化の基礎作業
平石直昭	東京大学・名誉教授	50年代後半の日本政治思想史講義の復元(1956、59年度を担当)	重要一次資料の翻刻公開の基礎作業
宮村治雄	成蹊大学法学部・特任教授	50年代後半の日本政治思想史講義の復元(1957、58年度を担当)	重要一次資料の翻刻公開の基礎作業
河野有理	首都大学東京都市教養学部・准教授	「正統と異端」研究会についての調査と資料整理	重要一次資料の翻刻及びデジタル化の基礎作業

【点検・評価、長所・問題点】

本プロジェクトに参加している研究者は、各々の分野の最先端で研究しつつ、丸山研究と現代の教養の研究において共通の接点と認識をもち、横断的に課題に取り組むことができる。

また、丸山眞男記念比較思想研究センターは、これまでも長く、資料調査・整理・公開・『センター報告』刊行等の事業を担ってきており、その経験と実績を踏まえ、丸山眞男文庫のデジタルアーカイブ構築を実現する力量をもっている。

各研究者及び丸山眞男記念比較思想研究センターの実績をもとに、研究テーマを明確に設定し、定期的連絡と研究会を行っている。

以上により、本プロジェクトを推進するため、適切な研究体制が組織されており、十分に機能していると評価できる。

【将来の改善に向けた方策】

プロジェクトの残り期間内(2015年度、2016年度)に所期の目標を達成するため、なお以下の点に留意することが必要と考えられる。

- ・研究者間・研究テーマ間の調整・連携を継続、強化すること。
- ・任期満了する特任研究員の後任に、適切な若手研究者を選任すること。
- ・大学院学生、若手研究者を育成すること。

第 章 研究計画の進捗状況とその成果

到達目標

研究計画に従って、各研究テーマ毎に研究を進捗させる。

1. 研究テーマ毎に定めた年度別の具体的な研究内容は計画通り進捗しているか

【現状の説明】

(1) 年次計画

本事業の年次計画概要は以下の通りである。

	研究テーマ 1	研究テーマ 2	共通
2012 年度	丸山の既刊著書・論文の網羅的調査。	未公開草稿資料の全面的調査と翻刻開始。	
2013 年度	丸山の研究の主題に沿って、これまでの諸研究を探索。	丸山に関連する欧米の文献調査。未公開草稿資料の調査をもとにデジタル化を開始。	
2014 年度	初年度以来の業績をふまえ、中間シンポジウムを開催し成果をまとめる。	未公開草稿資料類の調査をもとに翻刻を進め、デジタルアーカイブ・システム構築に向けた準備開始。	自己点検・評価を行う。中間報告を行う。
2015 年度	丸山を中心とする近代日本の教養の思想的系譜に関する研究を進める。	未公開草稿資料の調査のデジタル化を進め、アーカイブ・システムを構築し、部分公開を開始する。	
2016 年度	20 世紀日本における教養についての国際シンポジウムを開催し、5 年間の成果をまとめる。研究成果を刊行する。	未公開草稿資料類のデジタルアーカイブを完成させ、資料を公開する。20 世紀日本における教養についての国際シンポジウムを開催し、5 年間の成果をまとめる。研究成果を刊行する。	プロジェクト全体についての自己点検・評価及び外部評価を実施する。

(2) 研究計画の達成状況

現在までの進捗状況及び達成度は、以下の通りである。

本プロジェクトでは、テーマ 1 とテーマ 2 はそれぞれに独自性の強い課題をもって研究を進めている。テーマ 1 では、個々の研究者の研究を基礎とし、テーマ 2 では、デジタルアーカイブの構築のための共同作業を中心としているが、両方のスタッフを含めて研究状況の共有並びに対外的公開を行い、全体的統一をはかっている。(資料 1「研究成果とその発表状況」に対応する業績は、「～」で示した。また、同「研究成果の公開状況」欄に、以下 a から c の各回の内容を記載した。)

- a) 研究会 (隔月開催)
- b) 公開研究会 (年一回開催)
- c) 講演会 (年一回開催)
- d) 『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』(年一回刊行) プロジェクトの研究成果の報告。
- e) 中間シンポジウム (2014 年 6 月開催)

現代世界において丸山がどう読まれ、それがどのような意味をもっているかをテーマとして開催した。苅部直「政治のための教養 丸山眞男百歳」は、現代において市民が政治にかかわっていくための教養として、ルールを共有した上で競いあう「遊び」の修練を重ねることをリベラル・デモクラシーが存立する条件と考えた丸山に学ぶべきものがあると論じた。油井大三郎「丸山眞男とアメリカ文化の交錯」は、「自立した市民」の育成に生涯をかけた丸山から学ぶことが現在切実な課題となっているという問題意識から出発している。區建英「丸山と中国の近代的思考の模索 私の世代の体験を中心に」は、日本の精

神構造の深層に潜む「執拗低音」を捉えようとした丸山思想史方法論が、今なお儒教の伝統が深層で持続している中国において、アクチュアルな問題関心のもとに受容されていることを明らかにした。趙星銀「韓国における丸山眞男」は、個人の自立と政治との緊張を「自由」の問題として考える経験が乏しい韓国では、丸山が探究した「反・反共」の自由というものを理解することが必要であると論じた。

テーマ1「20世紀知識人の教養と学問 丸山眞男文庫を素材として」

2012年度には、丸山眞男の日本政治思想史研究の全体像の把握につとめ、各研究者が刊行済みの講義録等を網羅的に読み、丸山眞男文庫所蔵の未公刊草稿資料類の内容を把握するようにした。その中で、以下のような研究が進められた。

- a) 前近代日本における宗教と政治の問題を扱った丸山の著作を調査した。
- b) 戦後日本の民主化と教養・文化・教育をめぐる思索内容を、丸山が師とした長谷川如是閑との関係と比較において分析する作業を進めた。
- c) 近代日本におけるリベラル・アーツ、教養の系譜、丸山の学問とアメリカの学問・社会・政治との関係、近代中国思想との関係などを検討した。

2013年度には、丸山眞男が研究した主題に関連するその後の諸研究を、各研究者が探索しつつ、各自の課題を追求した。具体的には、主に次のような研究を進めた。

- a) 丸山の学問に関連する欧米及び中国の文献の研究。
- b) 長谷川如是閑と丸山の比較分析及び関連文献と資料の調査と整理。
- c) 1950年代の世界情勢、国際環境と政治思想の動向についての調査。
- d) 近代日本におけるリベラル・アーツ、教養の系譜として、新渡戸稲造と矢内原忠雄の理念・実態に関する研究。
- e) 20世紀の知的コミュニティの実態についての調査と考察。

2014年度は各研究者が、これまでの研究成果の中間的なとりまとめを試み、研究会・シンポジウム等において意見交流を行い、研究を深めた。具体的研究内容は、主に次の通りである。

- a) 戦後日本の民主化と教養・文化・教育をめぐる思索内容を、丸山が師とした南原繁との比較において分析し、整理した。
- b) 新渡戸稲造についての研究及び戦後日本の教養教育の実態について検討する。
- c) 丸山が精神的貴族主義を構想するにあたり念頭においた諸思想を検討する。
- d) 丸山の「執拗低音」の視点に基づき、中国の伝統思想の構造を分析する。

研究者ごとの進捗状況の概略は以下の通り。(各研究者の業績は前述の資料1を参照)

- ・安藤信廣 2012・2013年度は、主に幕末期日本の政治思想について調査・考察した。吉田松陰の思想につき考察する過程で、水戸学に集約される問題意識 儒学の自己発展という側面と対外認識の緊迫化という側面の葛藤 の再検討に力を注いだ(52-1参照)。2014年度は、水戸学全体の動向をふまえて幕末の知識人の思想について検討した。
- ・雨田英一 2012・2013年度は、長谷川如是閑の発言に見られる教育・教養の伝統とはなにかを明らかにするために、長谷川が精力的に取り組んだ戦時下での議論及び戦後の議論をとりあげ、時代の背景や思潮との関係で考察した(, 52-6参照)。2014年度は、これまでの考察をふまえ、なお長谷川の思想で注目される「形」の思想について検討を加えること、併せて、それとの関連で南原繁の思想を考えることを課題とした。
- ・小檜山ルイ 2012・2013年度は、主に丸山眞男の親世代にあたる知識人たちが、1920年代にその知の枠組みに女性や家庭の問題をどのように取り入れていたかについて考察し、本プロジェクト第3回研究会で報告を行った(52-3参照)。2014年度は、知識人と女性・

家庭問題についての検討を続けた(④⑧参照)。また、北海道大学新渡戸稲造文庫の調査を行い、それをふまえて、知識人の家庭認識等を考察した。

- ・茂木敏夫 2012・2013年度は、(1)丸山の日本政治思想史研究において東アジアがどう位置づけられているか、(2)丸山の議論をふまえることにより、どのような東アジア論が構築できるか、(3)東アジアからは丸山の議論がどう受けとめられているか、を課題とした。その成果については、二つの国際学会等で発表した(、④①, ④②, ④⑥, ④⑦, 53-2参照)。2014年度については、上記3つの課題をひきつづき検討し、東京女子大学の講義「中国研究」(2014年度前期)にも反映させた。
- ・湯浅成大 2012年度は、文庫所蔵の丸山の英文の手稿を調査した。2013年度は、「丸山眞男のアメリカ観」という自己の研究テーマにつき、アメリカ政治学との接点を模索した。2014年度は、テーマ2の新資料の調査にも加わり、丸山政治学とアメリカ政治学の関係性についてさらに考察した。
- ・油井大三郎 2012年度には、1960年代の社会運動の国際比較に関する共同研究の成果を刊行した(③⑩参照)。これを足掛かりに、丸山眞男とアメリカ文化の接点について調査を開始した。2013年度は丸山眞男とアメリカ文化の交錯に関して、近代化論をめぐる論争を中心に検討した。その成果は、2014年6月27日に開催された本プロジェクトのシンポジウムで報告した(51参照)。2014年度はその報告を基礎に、「思想の科学」グループなどとの関係を補充調査して、論考を準備した。
- ・區建英 2012年度には、丸山思想史学の方法と視点を運用しつつ近代中国思想を省察する一つの試みとして、国民形成における個人の自由を模索した中国の厳復の思想について考察した(③①参照)。2013年度には、主に丸山眞男の福沢諭吉研究の視点を通して、福沢諭吉の思想と中国近代知識人の思想とを比較し、中国の近代化について日本思想との共通点と相違点を探り、とくに中国思想の前近代から近代への継起における問題点を見出そうと試みた。その過程で、現代中国の文化大革命時代及び今日の改革開放時代の思想の深層に連続している思考様式を掴むことができた(④④, ④⑤参照)。また、丸山思想史学をめぐって、台湾大学などの研究者や大学院生と交流し、意見交換を行った。2014年度には、丸山眞男の「執拗低音」という視点によって、中国の伝統的な思想構造を分析した(51参照)。
- ・苅部直 2012年度には、丸山眞男の思想史的系譜の理解を深めることをめざし、近代日本の教養観について検討した。それとの関連で、丸山の精神的貴族主義について考察した。2013年度は、前年度にひきつづき、丸山の思想史的系譜の理解、丸山以前の教養についての認識について調査・考察した。2014年度は、戦後日本の教養・教育をめぐる思索につき、丸山及び丸山の師であった南原繁の発言に注目しつつ検討を進めた(、②⑧, ③②, ③③, ③④, 51, 52-4参照)。
- ・孫歌 2012・2013年度は、丸山眞男文庫で資料を収集して、未公開の丸山眞男講演録『孫文と政治教育』を発見し、丸山政治思想の重要な一面である近代中国認識について調査・検討した。また共産主義体制についての丸山の認識についても考察した。2014年度は、中国近代史における孫文の意味を考えるうえで、丸山のこのテキストを位置づけ、丸山政治学から照射された中国の政治原理を考察する作業を行った(、②⑦, ③⑧, ③⑨参照)。
- ・アンドリュー・パーシェイ 2012・2013年度は、近現代日本の社会科学の様相を、丸山の仕事を中心に概観した。2014年度は、丸山とアメリカ政治思想との接点を中心に両者の特徴について考えた(④⑩参照)。
- ・渡辺浩 2012年度は、前近代日本における宗教と政治についての丸山の著作を読み、かつ思想史的系譜につき考察した。2013年度は、主に、丸山の儒教・朱子学の解釈について研究を進めた。主な対象は、『日本政治思想史研究』『福沢諭吉の儒教批判』『忠誠と叛逆』『閻齋学と閻齋学派』である。2014年度もその研究を継続して進め、その成果の一部は、2014年7月にソウルで開催された、丸山に関する国際会議において発表した(④⑨参

照)。また、丸山の考える「人格」について、ジェンダーの観点から考察を加えることも試みた(53-3参照)。

- ・眞壁仁 2012年度は、前近代日本の政治思想について考察し、それに関する丸山の著作・関係資料等を調査した。2013年度は、近代日本の教養の位置づけをめぐって、矢内原忠雄を中心に考察し、その際丸山の観点を参照した。2014年度は、丸山の精神的貴族主義に触れて、前近代日本の思想家の再認識を行った。

テーマ2「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」

- ・丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査
計画通り、丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査が進んでいる(その報告として、丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査報告書、52-1参照)。また、松沢弘陽北海道大学名誉教授により同資料や丸山眞男文庫所蔵図書等を用いて新たな本文校訂がなされた『丸山眞男集』全16巻・別巻の第4刷(岩波書店)が2014年3月より刊行中。最後に刊行される別巻は、丸山眞男文庫所蔵資料の調査にもとづいて、大幅に増補される予定である。
- ・丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の翻刻公刊
これまでの調査の成果として、学術的に貴重な未公刊草稿を翻刻公刊した(丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類の調査報告書、52-2参照)。今後の翻刻刊行予定は以下の通り。テーマ2参加研究者を中心に編集集中の『丸山眞男集 別集』(全5巻、岩波書店)の刊行が2014年12月より開始された。そのための作業として、丸山眞男文庫に所蔵されている「正統と異端」研究会の録音記録80時間分の文字起こし作業を進めた。これとは別に、丸山が東京大学法学部で行った「東洋政治思想史」講義録の1956年度分より1959年度分までを、『丸山眞男講義録』続巻として、東京大学出版会より刊行する。
- ・丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類のデジタル化とデジタルアーカイブ構築
丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料類デジタルアーカイブに登録する画像を作成する、ブックスキャナーを用いた同資料のデジタル化作業が進行中。対象となる資料約4000点のうち、2014年9月現在、4分の1にあたる約1000点のデジタル化が終了した。また、デジタルアーカイブ・システムの構築準備を進めており、2015年(平成27年)6月に部分公開を開始する予定。
- ・丸山眞男文庫所蔵楽譜類の調査
土合文夫教授を中心に、丸山眞男文庫所蔵の楽譜類、とくに丸山自身の書きこみがなされているものを中心とする調査と研究が進行中(丸山眞男文庫所蔵楽譜類の調査報告書、52-2参照)。
- ・丸山眞男文庫所蔵楽譜類のデジタル化
ブックスキャナーを用いて丸山眞男文庫所蔵楽譜類の丸山による書きこみのあるページのデジタル化作業を行っている。2014年9月現在、丸山による書きこみのある楽譜434冊のうち、半分の215冊(作曲家名がB~L、Wで始まるもの)のデジタル化が終了、公開し閲覧可能となった(2015年3月全冊公開済み)。
- ・丸山眞男文庫所蔵書簡類の調査と翻刻公刊
主に松沢弘陽北海道大学名誉教授により調査とリスト作成が進行中。その中で、吉野源三郎が丸山に宛てた書簡36点を翻刻することができた(「吉野源三郎書簡 丸山眞男宛 36点」(『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第9号、151~178頁、2014年)。
- ・丸山眞男文庫バーチャル書庫の構築
丸山眞男文庫バーチャル書庫の構築を進めており、2014年度末に運用を開始できる状態とする。(2015年3月公開済み)これは、丸山眞男文庫所蔵図書が丸山家に所蔵されていた時の状態をwebページ上に再現するものであり、各図書が丸山においてどのような意味をもっていたかを明らかにする上で大きな意義がある。なお、本バーチャル書庫上に表示される各図書は、東京女子大学OPACに登録されている書誌情報とリンクさせる。

(3)研究成果等

丸山眞男の思考から、現代の政治に参加する市民のために生かされるべき教養のあり方を取り出した⁵¹ 荻部直「政治のための教養 丸山眞男百歳」、丸山眞男文庫所蔵未公開資料を利用して、これまで知られていなかった「正統と異端」研究会での丸山の思索の跡を明らかにした 河野有理「Legitimacyの浮上とその隘路 「正統と異端」研究会と丸山政治学」、丸山眞男文庫所蔵未公開資料を利用して丸山とアメリカとのかかわりや、近代化の理解をめぐって丸山とアメリカ知識人たちとの間に存在した齟齬とその意義を明らかにした⁵¹ 油井大三郎「丸山眞男とアメリカ文化の交錯」などをはじめとする成果が続いている。

本プロジェクトが順次行っている丸山眞男文庫所蔵未公開草稿資料類・楽譜類のデジタル化により、同資料へのアクセスが容易になった。その副次的効果として、同資料を利用した研究成果が現われた。その主なものとして、以下のものがある。

- ・西村稔「知識人と「教養」(一) 丸山眞男の教養思想」(『岡山大学法学会雑誌』64巻1号、2014年9月)
- ・権左武志「日本ナショナリズムの呪縛とその克服」(『現代思想』2014年8月号)
- ・奥波一秀「知性の患者 であること」(同前)
- ・大久保健晴「丸山眞男における明治思想史研究の展開」(The Asan Institute for Policy Studies 主催シンポジウム"Maruyama Masao and the East Asian Thoughts : Modernity, Democracy and Confucianism"、韓国・牙山市、2014年7月)

なお、プロジェクトの活動及び成果は、随時同プロジェクトの公式ウェブサイトで公開されている。(<http://office.twcu.ac.jp/facilities/maruyama/project/index.html>)

【点検・評価、長所・問題点】

- ・各研究者がプロジェクトでの研究課題に関する成果をあげ、着実に役割を果たしていることは評価できる。(資料1参照)
- ・資料の翻刻、デジタル化、バーチャル書庫及びデジタルアーカイブの構築準備は計画通りに進捗しており、独自性のある研究成果をあげている。前項に示した通り、学外においても研究が推進されるという効果をあげている。これらの点は、丸山文庫が丸山研究さらには日本思想史研究の拠点として広く認識されてきていることを示しており、研究拠点形成という事業目的に照らして高く評価できる。
- ・研究テーマ1、2が有機的に本プロジェクト全体の目的遂行に資していることは評価できる。とくに、研究テーマ2の進捗により、研究テーマ1の進行が加速されている。
- ・研究進捗状況の一部に、進んでいる者とやや遅れている者の差がある。研究テーマ1では、進度に差が出るのはやむを得ないが、研究者間の連携等をはかる必要がある。2016年に予定されている国際シンポジウムに向けて全体的な研究進度の調整と研究内容の集約をはかる。

【将来の改善に向けた方策】

研究進捗状況のバランスをとり、研究者間の連携等を改善すること、研究テーマ1、2の責任者がそれぞれの進捗状況を把握するとともに、両者の連絡を密にする。

第 章 研究費の配分と活用

到達目標

研究費を適正に配分し、研究実施のため有効に活用する。

1. 補助対象経費は適正に配分され有効に活用されているか

【現状の説明】

(1) 研究施設・設備の整備と利用状況

本学図書館内丸山眞男文庫室 74 m²及び丸山眞男記念比較思想研究センター 26 m²において 7 名が同文庫資料の整理と調査研究等を行っている。また、丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ構築のため、丸山眞男文庫室に高速かつ高解像度（400dpi）でのデジタル化が可能なオーバーヘッド型ブックスキャナー BookShot3600 を 2013 年度 10 月に設置し、草稿類資料のデジタル化を行っている。2014 年 8 月末日現在の累計稼働時間は 725 時間である。第 章で述べたように、設置後約 1 年の 2014 年 9 月現在、以下の資料のデジタル化が終了した。

- ・丸山眞男文庫所蔵未公刊草稿資料約 4,000 点のうち、25%にあたる約 1,000 点。
 - ・丸山眞男文庫所蔵楽譜類（書きこみのあるページ）430 冊のうち、50%にあたる 215 冊。
- テーマ 2 の進捗はきわめて順調であり、2016 年度の遅くない時期に完了する見通しである。

(2) 経費の見積り合理性

テーマ毎の補助対象経費の配分状況は、資料 2（研究進捗状況報告書 18「研究費の支出状況」）の通りである。当資料にもとづき、テーマ別の補助事業経費執行状況を比率で見ると、2012 年度はテーマ 1 が 37.4%、テーマ 2 が 62.6%、2013 年度は 41.1%と 58.9%、2014 年度見込みは 35.8%と 64.2%となっている。

なお、当資料に記載された経費以外に、テーマ 2 に関し、ポスト・ドクターの経費がある。主たる執行については、以下の通りである。

画像データ撮影機器

本事業では、デジタルアーカイブ構築に向けた丸山眞男文庫資料のデジタル化のため、画像データ撮影機器を私立大学等研究設備等整備費の研究設備として申請の予定を届け出していた。機種選定にあたり、読み取り解像度 400dpi 以上、高速スキャニング（1 秒）を条件としたが、2012 年 2 月申請時には、条件を満たす機種は事業計画額 600 万円となる一機種以外は見当たらなかった。しかし、2012 年 8 月に上記の条件を満たし、さらにリアルモニター機能による撮影画像を確認しながらの撮影が可能となる優れた性能の新機種が申請時の 3 分の 1 以下の価額（198 万 4 千円）で販売されたことが確認されたため、文部科学省及び本学理事に相談のうえ当該新機種へ選定機種を変更した。そのため申請要件を満たさなくなった私立大学等研究設備等整備費*については申請を行わなかったが、大学の負担額は申請時点の予定額とほぼ同額である。

*私立大学等研究設備等整備費：私立大学等の研究設備 1 個又は 1 組の価額が 500 万円（図書にあっては 100 万円）以上のものについて、購入に要する経費の 3 分の 2 以内の補助を行う文部科学省の補助金。

バーチャル書庫構築

本事業では前項で触れたデジタルアーカイブ構築の前段階として、2014 年度にバーチャル書庫の構築を計画している。（2015 年 3 月公開済み）バーチャル書庫及びデジタルアーカイブはシステム上の連携が必要であるため、双方を構築可能な業者への一括業務委託を検討してきた。2012 年 2 月申請時には、デジタルアーカイブの草分け的存在である A 社よりバーチャル書庫構築費用として 150 万円の見積額を提示されていた。しかし、2014 年度業者選定の際、A 社並びに、同分野で導入実績を上げてきた B 社から相見積を取得し

たところ、B 社の見積額の方が低く、構築費で約 60 万円、2016 年度以降の年間運用費で約 40 万円の差があった。

この結果、構築費用及び 2016 年度以降の年間運用費をできる限り抑えるため、B 社に発注することが決定している。また、B 社からは本事業に合わせたシステムの提案を受けている。

【点検・評価、長所・問題点】

前項で示したように、テーマ毎の補助対象経費の配分状況は大きく異なり、テーマ 1 よりテーマ 2 の方が、配分割合が高い。これは、各テーマの研究目的と研究方法が異なること、特にテーマ 2 の研究目的の達成には、研究の展開と成果の公開のために、設備の整備、それを動かす人的資源の投入、及びシステムの構築が必要であるからであり、適切な配分である。

たとえば、2012 年度にテーマ 2 で執行した経費の用途には、ノートパソコン及び周辺機器、2013 年度には画像データ導入に伴う作業費用、2014 年度の見込額にはバーチャル書庫構築委託の費用が含まれている。目的達成のために、必要性に従って研究費を適正に配分し、研究実施のため有効に活用することは、本事業を進捗させ成果を上げるための必須の判断であり、有効に活用されているといえる。

画像データ撮影機器については、購入までに時間を要したが、当初予定の機種よりも更に高機能を備えた機種を選定できた。また、大学の負担額を増加させずに処理することができた。これにより丸山眞男文庫所未公刊草稿資料及び楽譜の書きこみのあるページのデジタル化をスムーズに進めることができ、デジタル化された楽譜類は既に東京女子大学で公開され館内閲覧に供している。また、デジタル化が終了した草稿資料は 2015 年度始めにデジタルアーカイブとして部分的に web 公開を開始する予定である。(2015 年 6 月公開済み) このようにテーマ 2 のスピーディーな進捗に資したことは評価できる。

また、バーチャル書庫及びデジタルアーカイブ構築に関して、費用を抑えつつも本事業に合わせたシステム構築の実現が見込まれることは、テーマ 2 の事業の進捗と、本事業全体の研究成果の公開の充実にもつながることが期待できる。以上のように補助対象経費は適正に使用され、有効に活用されているとして評価できる。

【将来の改善に向けた方策】

バーチャル書庫とデジタルアーカイブの年間維持費が抑えられることとなったため、補助事業期間終了後の本事業の継続と、研究成果の公開の充実に役立てて行く。全体として、補助事業期間中に研究拠点としての体制を十分整えるよう検討・整備していく。

研究費の配分・活用については確実に実行しており、残りの期間においても着実な実行を継続する。

以上

追記（本中間報告以後、以下の事業を完了している。）

1. 丸山文庫所蔵楽譜類は、2015 年 3 月 31 日、丸山の書きこみのある部分のデジタル化が終了し、公開された。
2. 丸山文庫バーチャル書庫が、2015 年 3 月 9 日、公開された。
3. 丸山文庫草稿類のデジタルアーカイブが、2015 年 6 月 1 日、公開された。